

コーヒー商社訪問記

エチオピアの有機栽培コーヒー

児玉由佳

2004年12月、筆者は、エチオピアのコーヒーを取り扱っている食料関係の専門商社A社を訪問した。訪問の目的は、最近スーパー・マーケット等でよく見かけるエチオピア産の有機栽培コーヒーの現状を伺うためである。A社は、エチオピアのコーヒーを40年以上取り扱っており、日本の大手ロースター等へコーヒーを提供している。

以下は、聞き取りの内容を、筆者が再構成してまとめたものである。

◆エチオピア・コーヒーの買い付けについて

エチオピアのコーヒーの中では、シダモのコーヒーが特に日本人に好まれている。これは、気候や土壌が関係しているからだと考えられる。また、いわゆるモカ・フレーバーが日本では評価されるため、水洗式のものよりも、天日乾燥されたものの方が日本の市場には合う。ただし、ヨーロッパでは水洗式の方が好まれている。

コーヒーを買い付ける場合には、二通りの経路がある。一つは、ヨーロッパに本拠地をおく大手コーヒー商社から、ブランド・品質を問わず大量に買い付けるルートであり、もう一つは、生産国から直接買い付けるルートである。前者は、エチオピアに限らず多くの生産国と取引をしている商社から買い付けるため取り扱ひ量が多く、現地から直接買い付ける場合よりも安価な場合が多い。一方後者は、ブランドや品質を重視する場合のルートであり、エチオピアのモカ・コーヒーに関しては、現地からの直接購入は比較的多い。

ただし、現地からの直接購入の場合でも、エチオピアの品質評価のグレードだけでは、こちらの望んでいる品質かどうかは確実ではないので、新規参入してきた業者よりも、歴史があり信頼できる輸出業者との取引を重視せざるをえない。

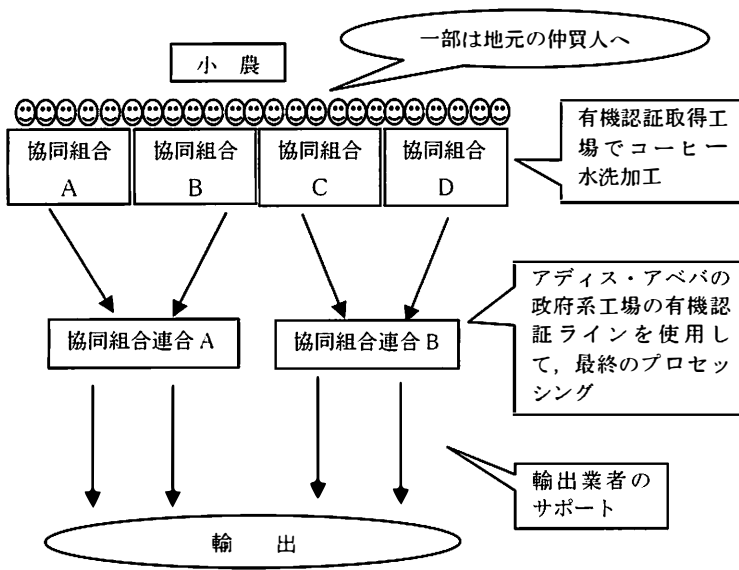
なお、A社がエチオピアの有機コーヒーを取り扱うようになったのは、エチオピアのコーヒーに有機の認証を獲得しているものがあることに着目し、A社が日本の大手ロースターに販売を提案したことがきっかけである。

◆エチオピアの有機栽培コーヒー

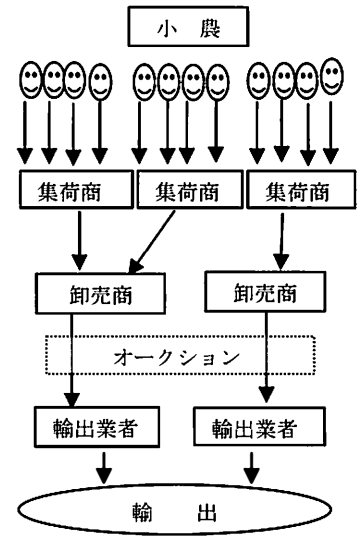
ここ数年のコーヒーの国際価格の低迷は、外貨の半分以上をコーヒーに依存するエチオピアにとっても大きな問題である。このような状況を改善するために注目されたのが、有機栽培コーヒーである。エチオピアでは、肥料や殺虫剤は輸入に頼っているため高価であり、食用ではないコーヒーにはほとんど使われていない。そのため有機の認証を取れさえすれば、農民に大きな負担もなく「有機栽培コーヒー」を栽培できるという目算が、政府側にあったといえよう。エチオピア政府は、有機栽培を軌道に乗せるために、これまでのコーヒー生産・流通とは異なる政策を採用している。

まず、特徴的なのは、有機栽培コーヒーが協同組合を通して販売されていることである。小農が中心であるコーヒー生産で、国際的に認められている認証を各自で獲得するには資金的にも知識的にも限界がある。そこで、有機の認証獲得のために、協同組合がその手

有機コーヒーの流通経路



通常のコーヒーの流通経路



続きを肩代わりするのである。現在、エチオピアの有機栽培コーヒーは、日本でも通用するドイツの有機の認証を獲得している。

もう一つの特徴は、有機栽培コーヒーは、輸出用コーヒーはすべて経由しなければならないオークションを通さずに輸出できることである。これは、協同組合活動の促進の意図もある。コーヒー・紅茶局(CTA)の話によると、流通の段階で仲買人にマージンを取られることがないように、協同組合が輸出まで扱えるようしているということである。

なお、最終商品の段階まで有機の認証を保持するためには、各加工・流通段階も有機の認証を確保する必要がある。したがって、流通経路は、

- ① 有機栽培の認証をもつ畑での適切な栽培
- ② 組合経営の有機の認証を持った水洗加工工場（一番外側の皮を剥がすための加工）
- ③ アディス・アベバの政府系コーヒー加工工場の有機認証獲得ラインでの最終加工（パーチメントを剥がす作業）
- ④ 輸出

という経過をたどる（図参照）。ただし、各個別の協同組合(cooperative)が関与するのは②の段階までで、その後の段階は、一定の地域を取りまとめている協同組合連合(cooperative union)が担当する。

協同組合連合が輸出も行なうが、輸出業務に関する知識や経験が不足しているため、ボランティア・ベースで現地輸出商社が橋渡しをしているケースもある。

なお、農民は、強制的に協同組合を通してコーヒーを売らなければならないというわけではない。地元商人に売るか、協同組合を通して売るかは、農民たちの選択である。

ただし、有機栽培コーヒーの価格は、通常のコーヒーよりも高めに設定されており、農民には魅力的であるといえよう。国際価格の変動に対しても、緩やかにしか連動しておらず、比較的安定した価格推移をみせている。

◆日本と有機栽培コーヒー

日本において、今後もさらに有機栽培コーヒーの需要が伸びていくかどうかは未知数である。もしかすると、有機コーヒー市場はすでに成熟したということができるかもしれない。なぜならば、コーヒーにまず第一に求められるのは味であり、健康への安全は、そのあとにくるものだからである。「有機栽培」であるということは、味の保証には直結しない。有機栽培は、一つの選択肢として定着したといえるかもしれないが、大きなシェアを占めるアイテムとなるのは難しいであろう。

（聞き取り：こだま・ゆか／アジア経済研究所）